

『Hic accipiet benedictionem a Domino. (斯く彼は主より祝福を受くべし。)』  
フェデリコとデボンニとは會堂の中央の小さな蓮臺の上に棺を載せた。一同其處に  
跪いた。そして、牧師は又他の讚美歌を誦した。それから此の無邪氣なもの、魂  
を天に迎へさせ玉へと云ふ祈願を高らかに唱へた。それから又聖水を最一度棺の上へ  
撒いた後、彼は役僧どもを従へて會堂を去つた。

私どもは一同立ち上つた。最早此の小さな棺を最後の安置所へ移す外に爲ることは  
ない。デボンニ・デイ・スコルデヨは兩腕に輕々とそれを持上げた。彼の眼は硝子の蓋  
に固着して居た。フェデリコは先づ納骨窖へ降りた、老人が柩を持つてそれに續いた。  
私と家族の者とは一番後から這入つて行つた。何人も物を言はなかつた。

納骨窖は廣々として、盡く灰色の石で疊まれて居た。四方の壁には幾個の壁龕が  
設けてあつた。其の或物は石板で閉ぢられ、他の物は深く暗澹とした口を開いたまゝ、  
居住人が来るのを待つて居た。圓天井からは橄欖の油に養はれる三つの洋燈が靜かに

吊下つて、じめくした重い空氣の中に、消えずの燈火の細い舌にちりちりと燃えて  
居た。

『此處に』と、私の母は既に石板で蓋をされた他の壁龕の下の口を開いたのを指差  
しながら呟いた。上の壁龕には、コスタンザの名が臙ろに光る文字で刻まれて居た。

デボンニは其時柩の中の小さな姿に最後の一瞥を惜しませようとして、私どもの  
方へそれを差出した。私は其の小さな顔を、可憐な組合せた手を、白い上袍を、白菊  
の花を見詰めた時、それが皆何とも判らない程遠く離れて、手に觸れられないものゝ  
やうに見えた——恰も柩の透明な蓋越しに、何か超自然の神祕——怖ろしい、又快  
い——の短い瞥見を許されでもした時のやうに。

何人も物を言はなかつた。殆ど私どもは皆息をすることも罷めたやうに見えた。

デボンニは振向いた、俯向いた。そして、徐々と棺を奥の方へ押して遣りながら、  
それを壁龕の中に安置した。それから彼は床に跪いたまゝ、二三分の間靜乎として

動かなかつた。

柩は壁龕の奥からぼんやり光つて居た。そして、洋燈の光は斯うして冥府の閻の上  
に跪いた尊い白髪頭の周りに和らかな圓光を投げて居た。

# 犠牲終

(個製本)

大正六年四月二十六日印刷  
大正六年四月二十九日發行

犠

牲

【非賣品】

編輯者兼  
發行者

國民文庫刊行會

東京市神田區小川町一番地

右代表者

鶴田久作

東京市本郷區四片町十番地

印刷者

中島藤太郎

東京市神田區錦町三丁目一番地

印刷所

神田印刷所

東京市神田區錦町三丁目一番地

著作權所有

發行所

電話本局區七三三番  
振替東京一八五七二番

國民文庫刊行會

355  
6912

終

